

令和6年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会（概要）

日時 令和7年2月26日（水）13：30～18：15

場所 かながわ県民センター11階 コミカレ講義室2

■ 開会

（かながわ県民活動サポートセンター副所長から本日の予定を説明）

○ 委員8名での開催

○ 会議の流れを説明

13時30分～14時40分 プレゼンテーション審査事前確認

14時50分～16時35分 令和7年度実施分 ボランティア活動補助金（新規）のプレゼン審査

16時45分～17時55分 プレゼン審査に対する選考

18時00分～18時10分 令和7年度実施分 協働事業負担金の最終選考

18時10分～18時15分 令和6年度実施 協働事業負担金の変更について

18時15分 閉会

（審査会長より開会の宣言）

○ 令和6年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開会する。

○ 率直な意見交換を通じて公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第1号に該当することから非公開とする。

ただし、プレゼンテーション審査は公開とする。

■ 審議事項1 令和7年度ボランティア活動補助金事業（新規）の対象事業選考

（事務局から以下について説明）

○ ボランティア活動補助金事業（継続・新規）事業別申請状況（資料1）

○ 来年度のボランティア活動補助金（継続・新規）の予算計上額（資料2）

○ 審査委員と利害関係のある団体からの提案なし

○ 事務局からプレゼン審査対象団体の申請概要及び幹事会での事前調査結果について報告（資料3、4）

（委員による審議）

○ ボランティア活動補助金への申請事業に係るプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

○ ボランティア活動補助金の申請事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。

【キッズビデオワークショップとかながわ・わがまち映像祭の開催】

特定非営利活動法人ちいき未来（以下「ちいき未来」という。）によるプレゼンテーション実施。

<質疑>

（石田委員）

今回、2つ事業の提案があり、1つがキッズビデオ映像制作で、もう1つがビデオワークショップとなっている。

ビデオワークショップの方について伺いたい。

申請書の記載に、貴団体の目的として地域コミュニティの活性化とあるが、特別支援学級や不登校の教室、こうしたものを対象としたワークショップが、団体の目的から直に出てくる内容ではないと感じた。団体の目的が地域コミュニティの活性化、あるいは地域の活性化に寄与するとあるが、ここから特別支援学級や不登校の教室を対象としたビデオのワークショップというのが素直に結びつかなかった。これはどういう形で結びつくのか、また、団体の中で、このビデオワークショップはどのような位置付けとなっているのか、主要な事業なのか、また、たまたまこの事業をやったろうまくいったので続けているのか、そのあたりのところを聞かせほしい。

（ちいき未来）

ワークショップ自体をやっていくということは、団体としては、主体だということで動いている。

もう1つは、地域との結びつきということであると、個別支援学級の子どもでは中々難しいところもあるが、先ほど、小田原の事例を出したが、一般学級の子どもでやる場合は、地域映像をものすごく作っている。学校周辺のいろいろな地域映像を作ったり、学校自体と地域の人が結びついて150周年記念の映像を作ったりしている。映像自体は非常に情報量が多いので、1分間の映像の中でも、結構地域のことは盛り込んで作ることが出来るというふうに思っている。

（石田委員）

子どもたちに対して映像制作を指導することは、団体の目的にも適っていると考えているということか。

（ちいき未来）

そのとおり、地域と結びつく1つのツールとして映像があるというふうに考えている。

（石田委員）

特別支援学級とか不登校の教室というのは、やはり一般の学級の子どもと比べると、非常に対応するのに難しさがあると思うが、それに対しては、数年間の経験を通じて、それなりの習熟したスタッフがいるということか。

(ちいき未来)

個別支援学級に関しては、私が行ってやっている。

プレゼンした資料の中に、コマコマというものがあるが、このコマコマは、すごく簡単に駒撮りアニメを作れるアプリで、これが個別支援学級の子どもがものすごくはまって、簡単に物を動かしていきながら駒撮りアニメがすぐ作れる。例えば、消しゴムを使ったり、折り紙を使ったり、ちょっとした人形を作ったりして、このコマコマで人形アプリを作って、その後、キャップカットという編集アプリを使って、今度は効果音を入れたり、それからタイトル入れたりすることも個別支援学級の子どもたちができるようになって、ものすごく変わって来ている。全然話しをしなかった子どもも、駒撮りアプリを使ってから、ものすごく映像を作るようになった。

(石田委員)

アプリを使うことでどの様な子どもも対応ができるようになってきているということか。

(ちいき未来)

そうである。

(石田委員)

映像祭の方について、これについては従来から何回もやってきて、今回、基金の補助金を使うということだが、それは、今までの形ではやりにくくなった、あるいは資金が足りなくなったということか。

(ちいき未来)

現在、コスト的には非常に厳しくやっているのと、もし今回、基金事業としてできると、今後のスポンサー集めにも役立てられると考えている。

基金 21 をやるというのは、ものすごく信頼度を持てるので、基金 21 がこの事業をサポートしていただけるとなると、ものすごく状況が変わってくると思い、今回、補助金を申し込ませていただいた。

その後、事業を継続するための一つの手段として、今回、応援してもらえると、ありがたいと思っている。

(石田委員)

映画祭の中で、基金 21 の助成を受けているということを謳いたいということか。

(ちいき未来)

もちろんそうである。ワークショップの方も同様で、この後いろいろこの後の展開もできるかな、やりやすくなるかなと思っている。

(石田委員)

仮に、補助金が出なくても映像祭はやり続けるのか。

(ちいき未来)

開催することに非常に意味があると思っているので、補助金が出なくとも、なんとか頑張ろうと思っている。

(石田委員)

補助金終了後の展望の中で、プラットフォームとコンテンツカフェと映像ワークショップやユースメディアセンターなどがあげられていたが、こうしたものを立ち上げるのに、経費は、寄付や他の補助金を見込んでいたとのことであったが、それはもう確約されているのか、あるいは見込まれているのか。

(ちいき未来)

今年、ユースセンター等を作るため着手する予定で、1つの目標として考えている。横浜市から、それらを対象とした補助金があるので、それをベースにしてやろうとしており、今、横浜市と、神奈川区の中で場所を探しているところである。

(石田委員)

横浜市の補助金をある程度期待しているということか。

(ちいき未来)

ヨコハマ市民まち普請事業という事業があって、それを利用しようと思っている。それで、不登校から色々な方々が来られる居場所作りを考えていて、そこに来れば、皆誰でもコンテンツも作れるような形の居場所を作ろうと思っている。

(石田委員)

いわゆるまちづくりの一環として、地域の活性化の一環となるということか。

(ちいき未来)

おっしゃるとおり。

(石田委員)

横浜市から補助金があれば、2年後、3年後待たずにもう立ち上がるということなのか。

(ちいき未来)

出来たら、来年には立ち上げたいが、横浜市の補助金を通るかまだ分からないので、今年か来年には立ち上げたいと思っている。物件は、今、1軒探しているところだが、まだこれからというところ。

(石田委員)

プラットフォームとかユースメディアセンターとか将来的に予定されているということだが、こうしたものが本格的に動き出した場合でも、特別支援学級の子どもたちを対象とした事業も継続してやっていくということになるか。

(ちいき未来)

団体としても継続してやりたいと考えており、先生方とか青少年に関連している方々も、映像を作るということについては不慣れである。なので、このプラットフォームを作って、皆さん、これを見ていただければ、ある程度、映像づくりのことが分かってもらえるというふうに考えている

昨年も 138 本の応募があり、その中から何本かはプラットフォームの中に残していったり、メディアリテラシー自体も色々な映像をもっと作らなければならないことがあったり、それから、こういう段階でやると、個別支援学級だったらこうふうにやったら作りやすいとか、一般学級だったらこういうふうなのがいいとか、方法論も入れて映像を作ろうと思っている。

(石田委員)

この先生方というのは、学校の先生か、それとも教育委員会の先生方か。

(ちいき未来)

分けはしておらず、教育関係者、皆さんに見ていただきたいと考えている。

(為崎委員)

先ほど、不登校・引きこもりの方たちのワークショップをやってきたとの話があったが、今回、基金 21 の協働事業とすることで、今までとはどのように違い、何が新たに生まれることになるのか。

(ちいき未来)

一つは、学校関係のところにもっと、この情報を流していきたいと思う。

今回、もし補助金がとれれば、神奈川県のお墨付きをもらったような形になる。

そうすると、学校関係者にも会いやすくなる。学校の中でも、個別支援学級をやっている先生方は、生徒が増えてきており、非常に大変な状況になってきているので、団体の事業がやりやすくなると思っている。そのために今回、基金 21 の補助金の申請を出した。

(為崎委員)

メディアリテラシーを広めるとか、映像ワークショップを開催するなど、いろいろな取り組みがある中で、今回の申請事業において、対象としているのは個別支援学級や不登校の生徒、母子家庭、発達障がい児、外国人などだが、この方たちの関与率は事業全体に対して何パーセント程度となることを想定しているのか。

(ちいき未来)

60～65%程度と感じている。

(為崎委員)

そうすると、映像祭にもかなりそういう方たちの応募があるということか。

(ちいき未来)

その通り。そのような学級の授業を持っているが、先ほど説明したコマコマなどを利用して、かなり多くの作品を出している。

個別学級から出ている作品が 190 本の中で結構多く、多分、35 本ぐらい個別支援学級とか不登校の子の作品が占めている。

(為崎委員)

今、専門知識を持たれているご自身が、学校に行ってやられているということだが、将来的にご自身が行かなくても学校自体の中で回るような体制を作っていく予定か。

(ちいき未来)

そうである。私が全部行けるわけではないので、そのためにプラットフォームを作りたいと考えている。こういうやり方がありますよというプラットフォームを作って、教育者の方に見ていただきたいと考えている。

映像についてはやり方さえ教えれば、特別支援学級とか一般学級とか分け隔てなく、必ず作れるようになると思っている。1つの学校では、もう先生が分かっている、自分たちですっかり教えて制作しているところもある。

(為崎委員)

それから、映像ワークショップの実施エリアだが、幹事会からの質問に対して、主に横浜、川崎という回答があったが、県の補助金事業なので、横浜、川崎等の政令市以外の中山間地域も含めての広いエリアで実施していくという考えはあるか。

(ちいき未来)

もちろん考えている。

今回、小田原に行ってワークショップを始めたりしている。それを広げるためのプラットフォームを作りたいというのもある。こういうことをやっているということをもっと知ってもらいたい、広げたいという気持ちを持っている。

(為崎委員)

今、小田原については既にやられていると思うが、今回、例えば補助金を受けて3年間事業を行えることになった場合、どのくらい、新しいところが開拓、波及させられるのか。

(ちいき未来)

小田原以外に、今、東急の仕事を受けており、県内の色々な箇所の子ども向けの団体と連携が取れており、それら団体もやりたいと言っており、大分広がると思う。

【県内2か所における日本語学習支援】

NPO法人多文化共生ボランティア団体 KAM による（以下「KAM」という。）プレゼンテーション実施。

<質疑>

(高村委員)

元々、3カ所でやっており、今回の申請では2か所。申請書をみると、やっている内容は同じビジョンだと思うが、元住吉でやっていることと、綾瀬、高座渋谷とでは形態は違うが、その違いについて、また、始めた理由を教えてください。

(KAM)

3か所になったきっかけは、自身が高校教諭であり、綾瀬市の高校にいた際に、外国人の子もたちの問題・課題に突き当たった。綾瀬市は、外国人がどんどん増えてきている現状で、綾瀬市には、2つ高校があるが、外国人支援に特化しているような学校ではなく、このまま増えていくと学校が潰れてしまうと思っていた。

支援も体制も整っていない、そうした場合に、どこか支援しているところがあるのか調べたところ、綾瀬市にはなかった。そこでこの綾瀬市を拠点に何か支援したいと思い、綾瀬市からスタートした。

また、教えている生徒の保護者が、高座渋谷に住んでおり、インドシナ難民で来られた方で、日本に20年以上住んでいるが、日本との繋がりがなく、日本語をしっかりと学んで、日本に貢献したいのだという話を聞き、日本語支援をスタートさせていただいた。

高座渋谷は元々、考えてはいなかったが、子どものお母さんが周りにもいっぱいいると聞いて、家の中からスタートさせていただいたが、人が溢れていって、ここも重要なのだと感じたことと、保護者の視点で子どもを見ることができるというところで、高座渋谷も拠点を作ろうということになった。

また、元住吉の方は、メンバーが元住吉の方にもいて、場所を貸していただけになった。それで、ここでも何かできないかということで、このエリアはビジネスマンや留学生が多いエリアなため、そこにフォーカスを当てて支援をスタートしたらどうかというところで、この1年間はトライアルという形で始めさせていただいた。

(高村委員)

綾瀬から始まり、人とのつながりで拠点が広がっていったということが理解できた。

プレゼンでは、綾瀬についての強い思いを感じた。申請書の中でも、1番目は高座渋谷で、2番目は綾瀬市とあるが、事業1の高座渋谷については対象人数の記載がなかったの

で教えていただきたい。

(KAM)

プレゼンでご説明したとおり、3拠点それぞれ目標が違う。

高座渋谷は、生活自立支援という形で、生活者としての外国人の支援になる。

子どもたちの支援は現在も行っているが、生活者のお子さんという立場で支援していて、現在4、5名しか来ていない状況。

ただ、綾瀬が軌道に乗ったところで連携をとらせていただき、高座渋谷の方も、小学校や中学校と連携しながら進めていきたいと思っている。

(高村委員)

続いて、予算書について伺いたい。予算書について。設立当初70万円の寄附をもらう予定だったのが、初年度4万円からスタート、その後、2年目からは9万円と倍増しているが、見通しはあるのか。

(KAM)

まだ見通しはない。今回の補助金が決まったら、それなりに手を打ちたいと思っている。

(高村委員)

了解した。事業展望の中で組織体制の整備のこととか、今後の課題も詳しく書いているが、その辺は、予算書の方にはあまり反映されてないという感じがした。並行して3事業を行うと思うが、3年間の中で2つの日本語学習支援の拠点で、あるいはもう1カ所も含めて取り組むなどで、計画・予算に反映させている、または、考えていることがあったら教えてほしい。

(KAM)

人を育てて、マニュアルを作っていくことが事業の肝だと思っている。一応、事務費としてそういうことをまとめる費用を考えている。

なんとかPDCAサイクルを回せるような仕組みを作りたいと思っており、人件費の中に入れている。人件費は2つあるが、例えば高座渋谷では、日本語講座1時間1,500円かける3時間を56回、JLBT対策講座1時間1,500円かける3時間かける20回、規定マニュアル作成業務スタッフは、1,200円かける40時間を計上している。

(為崎委員)

全体では3つの拠点で事業を実施されていて、それぞれ独立した体制で日常は運営されているようだが、統括する本部機能のようなものがどこにどうあるのか、各地域の体制と、それを取りまとめる本部の機能について教えてほしい。

(KAM)

私たち3拠点でやっているが、それぞれの場所のリーダーが理事になっており、高座渋谷

谷は宇津野が、綾瀬は日浦、元住吉は浅野が実施している。現在は、理事会が月 1 回行われており、そこで情報共有させていただきながら、お互い意見交換したり、アドバイスをしながらやっている。

(為崎委員)

補助金を活用するとなると、事務局体制もかなり大切になるが、そういったものは、どなたがやっていく予定なのか。

(KAM)

そこも考えていかななくてはならないが、基本的には宇津野（私）が事務局として動いている。

(為崎委員)

代表が事務も担っているということで了解した。

県の補助金なので、3 年間やっていく中で、県域に波及させるということも検討していただきたいと思うが、今、3 拠点でやっているそれぞれのノウハウを自らで移転させていく、各地域に伝えていくような形になるのか、それとも同じような活動をしている団体とネットワークを組む形になるのか、何か県域を対象に波及させるイメージがあれば教えて欲しい。

(KAM)

私がいろいろと調べるかぎり、横浜市にもいくつか団体があり、県央部にはない。県央部の外国人の増加に対して外国につながる子どもの支援をやっていききたい。金額は、今、あえて 500 円としているが、これはボランティアの団体の中ではかなり珍しいものと思っている。費用としてはそれくらいかかるものなので取っているが、その代わり専門的なものを教えていきたい。

後、もう一つ言わせてもらおうと、この子どもたちは、日本語さえなんとかなれば、それぞれの地域でリーダーになれる素質はある。そういう意味で 500 円くらいかけて、日本語を勉強しなさいと、そのようになったら、神奈川はこの問題を結構昔からやっているが、ぜひ全国の先駆けとなるぐらいのモデルにしていきたい、というふうに考えている。

(為崎委員)

将来的に補助金がなくなった場合に、受益者負担をこれ以上増額するのは難しく、また、寄付金も増やすことも難しいように思われるが、補助金終了後の自立化のようなものは考えているか。

(KAM)

サービスと付加価値との共存だと思う。月謝 6,000 円を 30 人くらい集めればペイできる。その価値を分かってもらえるかどうか。一般の塾が、週 1 回で 9,000 円から 1 万円なので、それくらいは親とのコミュニケーションも含めてできればというふうに考えている。

(KAM)

もう一点、今、外国につながる子どもたちにフォーカスを当てているが、生活者である大人たちのところも支援させていただいているが、企業がものすごく感心を持って見に来てもらっており、今、連携を取り始めているところ。寄付金であったり、会員になってもらったりを考える企業もあり、今年からその動きが来るのではないかと考えている。

(為崎委員)

多様な道筋を探っていくということか。

(KAM)

そうである。

【医療的ケアに関する啓発資料作成およびその配布】

特定非営利活動法人 Small Step（以下「Small Step」という。）によるプレゼンテーション実施。

<質疑>

(山岡委員)

この事業の目的を考えると、絵本を作るということもそうだが、それ以上にその普及啓発がより重要になってくると思われる。この補助金事業の中では、保育士、看護師による読み聞かせ、それから相談支援を実施されるということだが、これは補助金の3年間で終わった後も続けていくということか。

(Small Step)

私たちの事業の中で、中間支援事業として、外の保育園だったり幼稚園だったりとかに出向くというような事業もやっており、その中でもこの絵本を使っていきたいというふうに考えている。

また、イベントも色々とやっており、その中で今後も啓発として使っていけると考えている。

(山岡委員)

今回その絵本を実際にもう既に作られているということだが、普及啓発のツールとして、絵本を選ばれた理由、例えば他にも、動画を作るとか、色々と手段はあると思うが、その中から今回絵本が有効だと考えた理由、背景を教えて欲しい。

(Small Step)

私たちは、医療的ケアに関してずっと取り組みを行っている団体だが、医療的ケアの啓発についてはすごく苦戦してきた。様々な方法を試してきたがなかなかうまくいかなかった

た。法人内でワークショップをして、どうしたらいいかというのを検討していった。

保育士など、現場の方から、絵本は視覚的にもツールとしてわかりやすいのではないかと
いうことがあり、今回絵本の作成とした。

(山岡委員)

先ほど話もあったが、対象としては、すでに医療的ケア児を受け入れている施設が、そ
の中で、そうでない方やご家族へのご説明ということと、もう1つ、今は医療的ケア児を
受け入れていないけれども、今後受け入れていきたいという施設の2パターンあると思う
が、主にどちらを意識されているかということを知りたい。対象が違くとアプローチの仕
方も違ってくると思うが、対応として何か考えていることはあるか。

(Small Step)

どちらということではなく、両方というふうに考えている。それぞれ違った悩みがある
とは思っているが、医療的ケアが何か分からない、怖くてとっつけないみたいな方に対し
ては、絵本という、分かりやすい資料はとても有効だと思い、絵本を選定した。

それから、既に医療的ケア児を受け入れている施設等に関しては、実際に運営上の難し
さは本当にある。

そもそもは、そこをなんとかしたいという思いが、スタートとしてあり、絵本というツ
ールであれば、色々な人に理解してもらえないのではないかということで、その解消とい
う目的もあり、一旦、受け入れてもらってからの更なる理解と考えている。

(山岡委員)

医療的ケア児の問題に取り組んでいる団体は、他にも県内にたくさんあると思う。

普及啓発において、他の団体との連携や協力、あるいは、特に今回、県の事業として行
政と連携や協働するとより効果的になることもあるのではないかとと思うが、その点につい
て考えていることはあるか。

(Small Step)

やはり今回、基金に申請をした最大の理由はそこにある。「共に生きる」ということを
掲げている神奈川県の間図と、これに沿っているものであるとよいというふうに思ってい
る。

配布先に関しても、先ほど保育園や幼稚園等の話をしたが、園長会などそれらをまとめ
ている機関等に、初めに相談に行こうと考えている。

実際、既に相談をさせていただいている機関もあり、そのような流れを考えている。

(高村委員)

絵本を作るということで、配布先をどのように考えているかということだが、保育園、
幼稚園、こども園だけでも県内3,000以上あり、福祉施設も入れるとすると、さらに数
が増えてくる。エリア選定も含め、どうやって行くのかについて教えてほしい。

(Small Step)

おっしゃる通りだ。3,000以上の園、保育園、幼稚園があり、加えて障害福祉の事業所も含めると、もっと数が増える。最初、1,000冊と1,500冊とかいうふうに考えていたが、印刷屋に見積もりを依頼したところ、予算で2,000冊くらい印刷ができそうな見込みである。

実際の配布方法として、先ほど伝えたような、その基幹となるような団体を通して配布するというのが現実的だと思っている。予算内で可能な範囲で印刷し、それを順次配っていくことを考えている。有効なアドバイスがあればいただければ幸いである。

(高村委員)

公立、私立などもあると思うし、それから、園長会などの集まりのところに入っていくとしたら、県内たくさんあるので、そこはその交通費も含め、どういうふうに考えていくのかは予算に反映させる必要があると思う。

(Small Step)

配布については、私たちの活動で、できる範囲も限りがあるのも分かっている、今回はその冊数にさせていただいた。

ただし、パルシステムだったり、フォーデイだったり、色々な事業所との付き合いがあるので、そちらとも連携をとって、さらに冊数なども印刷できたり、協力いただけたらよいと考えている。

(高村委員)

お披露目会をするということだが、これが一番重要かなと思っている。作った後に使ってもらうのが大切。

来年度の提案として、場所や対象、人数、回数などはどう考えているか。

(Small Step)

3月16日のお披露目会は、私たちの居場所づくりサポート事業という事業の中の一環として行っていて、その事業としては、大体、月に1回から2回のイベントを開催している。その中でも使いたいということは考えているし、来年度の私たちの目標として、地域の色々なイベントに参加させていただくという形態も考えており、そのような中でももう少し広く周知していきたいと思っている。

(高村委員)

予算について。3年間の事業計画の中で、啓発資料の作成と配布ということで同じ記載になっているが、3年目の出口のところでどうなっていきたいかということを含めて、どんな予算を立てたのかを教えてください。

(Small Step)

予算に関しては、合計5冊の絵本を作成することを想定している。

まず1冊目に関しては、もう作成自体はほぼあと少しで、完了しているので、1年目に関しては、印刷がメインである。また、2冊目の作成費という**こと**になっている。

2年目が3、4冊目の作成と印刷、そして、5年目が5冊目の作成ということになっている。

(高村委員)

了解した。今年度の予算についての見込みは、会費の寄附という部分で、昨年の予算にはなかった部分が入っているので、その辺りの計画があれば教えてほしい。

(Small Step)

啓発資料なので、外に出していかなければいけないというのは考えている。クラウドファンディングの検討もしているが、私たちが外にアピールすることで会費なども増収できるのではないかと考えている。

(山岡委員)

配布に関することで聞きたい。例えば完成した絵本をウェブに掲載してダウンロードするなどは検討しているのか。

(Small Step)

検討はしているが、具体的なところは詰まっていない。

(中島会長)

対象となる園とか施設に対する、Small Step の認知度は医療的ケア児を支援するという中で、どれくらいあると思っているのか。

(Small Step)

自分たちで言うのもなんだが、少しずつ認知度が上がっているという実感はある。年々、その障害の子といえはスモールステップにとりあえず電話してみようというような電話などは受けられてきている。

【地域にひらいた、日中のこどもの居場所づくり】

ほとり（以下、「ほとり」という。）によるプレゼンテーション実施。

<質疑>

(田中委員)

一般社団法人やっほ一から、ほとりが独立して事業を行っていると話があったが、どちらの事業も、見ると事業が重複している部分がある。後、例えば、ほとりに来ている子どもに食事を出したりしているのは、やっほ一食堂の方からなのか、など、元の団体との棲み分けが分かりにくいところがあるので、その点を簡単に説明願いたい。

また、協力関係についても、良い効果が出ることにつながるようなことをされていると思うが、そのあたりについても説明願いたい。

(ほとり)

一般社団法人やっほーは、自分自身が代表理事として勤めており、立ち上げをさせていただいた。

元々、自分自身が中学校の教員だったこともあり、その不登校の子どもを含めた日中の居場所づくりをしたいという想いで、地域の子どもの居場所づくりをしようと、地域に住んでいる仲間とともに立ち上げた一般社団法人である。

ただ、その活動が続けるにあたって、自分自身がすべきことが多くなり、あまりにも多岐にわたる色々な事業があり、放課後の子どものことと、休日のイベントのことと、また、1番メインでやりたいと思っている日中の居場所づくりのことと、それらがあまりにも広くなってしまって、1番時間をかけて考えなくてはならない、向き合わなくてはならない日中の子どもたち個人個人との時間というものが取りにくくなってきてしまったというのが大きな悩みだった。

そこで、メンバーで相談をして、それではそれぞれ分けて良い形で連携をしていこうということで、セパレートで活動していくこととなった。

例えば、放課後のやっほーの時間に、日中の居場所に来ている若者がお手伝いという形で入ることもあれば、日中ほとりに来ている子どもが、漫画を描く時間が欲しいといってそのまま放課後までいて、それを見ている元気な小学生がその子に声をかけるとか、そういったよいつながりも生まれていることを実感している。

(田中委員)

事業を整理されたということ。

今後、もし、ほとりさんとしてどんどん団体が大きくなっていった場合、やっほーとの連携以外の場所、例えばそのコミュニティスペースやっほー以外で拠点を開設するなど、そういったことも展望に入れられているのか。

(ほとり)

検討している。大磯町は比較的空き家の問題が多く、色々なところで使った方がいいのではないかという声があったり、そういう場所の方が、もしかしたら、もっと自然豊かな環境の中で子どもたちと過ごせるのではないかということもあったりするので、他の拠点を使うということも視野に入れている。

また、固定した拠点でなくても、ヤドカリ的にコミュニティスペースやっほーだったり、近くのお寺のコミュニティスペースだったり、いくつか拠点を持っている仲間がいるので、そういうところでの活動も今後視野に入れている。

(田中委員)

計画書の中で、令和8年度から新たにカフェ事業をされるということを触れられていたが、このカフェ営業は、やっほー食堂とはまた別で行われるのか、場所は同じところでや

るのか、それともどこか物件を借りて、賃貸でやるような形になるのかなど、具体的に聞かせてほしい。

(ほとり)

もしカフェ事業を立ち上げることができたら、コミュニティスペースやっほーではなく、また、別のところで場所を借りるなり、自宅の一部を改装して行うなり考えている。

これが令和8年度の話で、来年度に関しては、そこに向けて今の活動を継続していきたいと考えている。

(田中委員)

人件費について、説明の中にもあったが、ボランティアは無償でやっていただいている中で、補助金があれば人件費で賄いたいということだった。

補助金終了後の展望として、別の補助金や助成金でまた人件費を賄うということも書かれていたが、事業の継続性や自立性を考えていくと、その部分は課題、という側面もあるかと思う。

全てではないにしても、本事業で補助金の交付がある間で、ある程度人件費が確保できるような仕組みを考えられないかという点について伺いたい。

(ほとり)

それも臨んでのカフェ事業。収入を少しでも得ることができるのではないか。ボランティア活動補助金をいただきながら事業を展開することで、町からの信頼も得られるのではないかと考えている。

そういった点では、急に町の委託事業にしてほしいということとはできないと思うので、継続希望調書にも書いたように、大磯町の委託事業としての展開を令和9年度にできたらよいと考えている。

(田中委員)

大磯町との調整、委託事業としてできないかということだが、定期的に大磯町と調整されているとのことで、どういった内容を調整されているのか。具体的に委託事業化されるということがどれくらい見えているのか、難しい点だとは思いますが、現状を聞かせてほしい。

(ほとり)

定期的に情報交換を行うという形では、教育委員会の管轄の教育支援室の先生に話しをしながら、それぞれのプライベートな内容になるが、小中学生、子どもの情報交換も行っているほか、毎年3月に教育委員会の教育室に行って、今後の展開について、ほとりについて毎年説明をしている。

その中で、続けていくうちに町の委託事業になったら嬉しいという話をさせていただいている。

(田中委員)

アピールをしっかりとしているということか。

(ほとり)

そうである。

(田中委員)

人件費を今後払うにあたって職員が増えるとなると、今も関わってくれる方たちが有償スタッフになるというようなことか。

(ほとり)

そうである。今、来ていただいている人たちには有償スタッフとして来ていただく。

完全ボランティアだと声をかけにくい部分もあるので、信頼がおける仲間にきちんと謝礼を支払ったうえで、人件費をしっかりと使ったうえでの声かけができると思う。

(峯尾委員)

スタッフの話が出たが、いることは確認できたが、その人数を教えてほしい。

(ほとり)

現在ボランティアで来てくれているスタッフは、元保育士の方が1名と、日本の様々なものづくりを学んできた20代の女性が1名、後は、心理士が月に1、2回程度関わってくれるということで、自分以外に3名いる。

そのほか、正式にボランティアとして来ているわけではないが、かなり定期的に遊びに来る地域の方など、色々な方が応援してくれている。

(峯尾委員)

その人たちを中心にして、計画では2025年度に中核となるメンバーを集めて、NPO化するという予定を立てているということでしょうか。

(ほとり)

そうである。

(峯尾委員)

大磯の地域センター「まんてん」は大磯町の施設だが、やっほーさんが業務委託という形を取っているのか。

(ほとり)

業務委託という形ではない。大磯町の社会福祉協議会が運営していた、地域のお年寄りのための施設であり、ご飯が食べられたり、ちょっとしたカラオケができたという色々な形の集いができるという場だったが、その運営がストップして、しばらくして、誰もこ

の場所を使わないでいるのはもったいないという話が上がってきたことから、その社会福祉協議会の方から、話があった。

それに対して、やっほ一が手を挙げて、使わせてくださいという形でプレゼンをして、通って、今に至る。

(峯尾委員)

社会福祉協議会の持ち物ということ。プレゼンをしてということなので、競争入札で、業務管理委託先としてやっほ一がやられているということか。

(ほとり)

委託事業ではないが、その場所を使わせていただいている。

(峯尾委員)

承知した。今度分かれて、ほとりが活動するときには、その使用料としてやっほ一に所定の金額を支払っているということか。

(ほとり)

私たちの方からやっほ一に使用料として支払ってしまうと、社協から借りている契約上よくないので、使用料としてではなく、寄付という形にしている。

(峯尾委員)

今後独立して、今メンバーは3名とプラスアルファだが、事務局体制については、一人で頑張られるのか。

(ほとり)

1番の悩みである。事務局機能もすべて自分でやるのはとても回らなくなるというのは分かっているので、今、ボランティアで来てくれている方の中で、手伝うよと言ってくれる方はいるので、もう少しそのあたりの話を詰めていきたいと思っている。

(峯尾委員)

詰めておかないと、やっほ一と同じことが起きかねないということ。

先ほども人件費の話が出たが、収支予算書の人件費は100万円程度だが、これは一人分か。

(ほとり)

20日分と書いており、一人分ということではない。ざっくりと書いてしまったが、実際は有償ボランティアという形で、1回につきいくらという形で支払うのがいいと思っている。

このあたりを変更する際は、きちんと書面で渡したいと思う。

(峯尾委員)

承知した。今の課題は、有償ボランティアの人件費を支払っていく予算をどこから捻出するかということか。

(ほとり)

そうである。

もしこのボランティア活動補助金が獲得できなければ、また1年は無償でやろうと考えている。

(峯尾委員)

補助金が終了した後も続けるためにどのようなことを考えているか。

(ほとり)

そのために、令和9年度の町の委託になるように働きかけをしようと思っている。

(峯尾委員)

それも難しかったら再度無償でやられるということか。

(ほとり)

それしかない。この事業のお金は利用者からは取れない。

【マイアース産学官子ども環境教育プロジェクト神奈川】

NP0 法人 SoELa（以下「ソエラ」という。）によるプレゼンテーション実施。

<質疑>

(尹委員)

このマイアースは、申請書によると、今までは、県よりも、もっと小さい市町村などでお作りになっていた。今回、どうして県という広域の地域で作ろうと思ったのか、実際、県域の環境は異なるので、小学6年生を対象とした場合、より県下の地域で行っていく方が関心が高まると考えているのか。

(ソエラ)

今までは、助成金のついた場所で展開をしていたので、小さい地域で行っていた。北海道で展開したとき、北海道でベースになる生き物がいるということだったので、神奈川県でもベースとなる生き物を作ったうえで、それぞれの地域で特色のあるカードを出していくという戦略を取っている。ブースターのようなものを作って、各地域で遊べるようにする戦略を取っている。

(尹委員)

今の回答からは、助成金がついたからそうなったというのでは、申請したからそういう立て付けになったと見て取れるが、その点はどうか。

(ソエラ)

地域ごとに、川崎市では、川崎市民活動センターの補助金での活動をやっていた。今回、神奈川県補助金ということで、大きな展開ができるということが1番のポイントとなっているので、神奈川県で助成金がいただければ、神奈川全域で展開拡大できると考えている。

(尹委員)

子どもが遊んでみて興味をもったとして、実際に現場を見るのが非常に重要になってくる。そこまで誘導するための方策を持っているのか。

(ソエラ)

マイアースはある意味バーチャルで、子どもが実際にシミュレーションするものだが、箱根町とはデジタルセンターと組んでいて、マイアースで箱根の生態系を勉強して、フィールドワークをして、最後に自分でカードを作るという授業を行っている。同じように、小田原市や鎌倉市でも、バーチャルとリアルを組み合わせたコンテンツを作っていこうと検討している。

(尹委員)

そう伺うと、ますます市町村単位で作成して、子どもに環境教育を受け取ってもらった方が効果があると思うがどうか。

(ソエラ)

このカードは、生態系と地球温暖化が戦うというもので、温暖化のカードは共通、生態系のカードのみ各地の特色を現わしているもので、地域ごとに生態系と温暖化を作ると非常にコストがかかるので、各地域では生きものや活動を作るが、赤いカードの温暖化の方は地域共通で使いコストの削減も図っていきたいと思っている。
実際は、地域ごとに行うというのが基本。

(尹委員)

県内外を問わずこれまでに作ったものは、どのような活用されていて、どのような効果が出ているか教えてほしい。

(ソエラ)

学校の環境教育を行っており、学習の時間にコマを取ってもらい啓発をする。ここに、各地の高校生や大学生が講師となって行っており、地域の子どもたちにとって親しみのあるネタとなっており、とても興味のあるものとなっている。また、地域で行っている環境

イベントに出展し、地域で啓発を図るというのが軸となっている。

(尹委員)

県版マイアースを作った場合、学校や図書館に配布するとなると、県内 33 市町村あるので、配布できる個数は非常に少なくなる。しかも、計画書ではイベントで楽しんでもらうのを想定しているが、数が少なく、果たして県域でできるのか疑問を感じた。

(ソエラ)

固定して置くところは限定させて頂こうかと思っている。例えば、鎌倉市、藤沢市、小田原市に固定して置く、他の地域はカードを持って行って、実際に体験会を行っていきたい。定点で置くところは 100 セット程度でまかなっていき、各地域には学生たちが実際に足を運んで体験会を行っていくと考えている。

(尹委員)

回数でいうと、どれくらいを想定しているか。

(ソエラ)

1 年に 10 回くらい。地域ごとに行っているので、神奈川県だけでいうと、10 回くらい行っていきたい。

(尹委員)

幹事会からの質問があったと思うが、回答の中で横須賀からの引き合いがあると言うことが書いてあったと思うが、なおのこと市町村で広げていき、今、県域でやるというのは、順番が逆ではないかと感じた。それについてはどうか。

(ソエラ)

その通りだと認識している。ただ、神奈川県でマイアースを知ってもらうことは重要で、マイアースって何と言われる前に、子どもたちがマイアースを知っているよとなる。全域でうまく展開していきながら、更には、平行して地域ごとに作っていき拡大していくと考えている。

(尹委員)

神奈川県には、政令市が 3 つある、都市部に住む子どもたちは、横浜市・川崎市・相模原市を意識することはあっても、神奈川県を意識することは少ないと思うが、そういう子どもたちに、どうやって関心を持たせていくのか。

(ソエラ)

実は、人の活動カードが 1 番のポイントとなっているが、人の活動カードは、人の活動と自治体の活動を知ることができる。神奈川県の活動を、カード化していくということで、各地域の方々へは、神奈川県の環境活動を認識して頂くように考えている。

(尹委員)

申請書の終了後の見通しに、企業協賛による資金の調達を考えていると書かれているが、現時点でも今の取り組みから充分可能だと思うがどうか。

(ソエラ)

企業が、費用対効果を考えるところもあり、お金をだす以上はどれくらい子どもたちに受け入れられるかが大きな問題となっているので、例えば神奈川県全体でマイアースの取り組みが普及すると、企業の協賛も取りやすくなると考えている。

(中島会長)

申請書には最終的な目標として、主体的に行動を起こす若者の排出とあり、そのプロセスに参加するのは重要だと思うが、神奈川県版の作成に当たっては既に作成チーム（大学・高校等）が想定されているが、そこに新しい人達が入る余地はあるのか。

(ソエラ)

もちろんある。今、想定しているのは、元石川高校、私は高校の校長をしていたので、そこから着手していこうと考えている。県立高校は校長会で話をしているので広めていくことは可能だと思っている。基本的には各地域の高校生・大学生に頑張ってもらいたいと思っているので、そういう意味でも、地域の高校生に参加してほしい。

(中島会長)

主体的に行動を起こす若者の排出というところで、カードゲームをやった後に、実際現場に行き、主体的に行動を起こす若者の排出にどのようにステップを踏んで繋がっていくと考えているか。どのように検証したりはかたりするのか教えてほしい。

(ソエラ)

1つは、追跡調査のような感じでアンケートを取っている。家庭で親に、「テレビの付けっぱなしはいけないよ」、などマイアースに書いてあるようなことを話して、会話が日常に出てくるようになった、「教室の電気を消すようになった」などの報告もある。もう1点は、実際にマイアースをやっていた小学生が中学生になってファシリテーターになると言う循環が生まれ始めている。これは北九州で実際におこっていて、教わる側が教える側に回るという現状にある。

(中島会長)

予算について、事業外収入とは、当事業の他の事業からの補填と考えてよいのか。

(ソエラ)

事業外は他の助成金も考えており、例えば相模原市はSDGs系の助成も獲得していきたいと考えている。

(中島会長)

資金の獲得ができた地域では実際実現できるが、県内偏りなく実施できるための取り組みは企業協賛という理解でよいのか。

(ソエラ)

その通り。やはり、企業から全面的に見てもらうのが1番よい方法。実は、企業獲得のために大日本印刷と提携しており、大日本印刷には企業向けに営業していただくという構図を取っている。何とか来年度から企業が入ってこないかと期待している。

(中島会長)

そこにある市販側の収益の見通しは、どれくらいか。

(ソエラ)

そんなにないが、パッケージを小田原市のかまぼこ博物館で少しだけ販売している。月に10個くらいしか売れてないが、これを小田原市のNPO法人に寄付している。神奈川県版が出てくると、神奈川県全域で販売できると期待を持っている。

(委員による審議)

○ ボランティア活動補助金事業(新規)の申請事業に係る公開プレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、事業を選考した。

※ 選考結果は後日団体に通知。

■ **審議事項2 令和7年度実施分 協働事業負担金の対象事業(継続・新規)の最終選考**
(事務局から令和7年度協働事業負担金協議結果について説明(資料5))

○ 県協働部署との協議結果を受け、来年度実施する事業を選考した。

■ **審議事項3 令和6年度実施 協働事業負担金の事業変更について**

○ 令和6年度協働事業負担金事業の変更希望について、審査会の意見を聴取した。(資料6)

■ **閉会**

(審査会長より閉会の宣言)

○ 令和6年度第6回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を閉会する。

(以上)